

# 「いのち」を感じ、命を大切にしようとする心の育成をめざして —家庭や地域との連携を通して—

## 半田市立宮池幼稚園

### 1 はじめに

最近、社会で子どもの命にかかわる問題がよく起きている。それは、以前は家庭や地域を通して育っていた助け合いや思いやりといった精神が、今は身に付けていくことが困難な状況にあるからではないかと考える。そこで、人間として生きていく上で基本となる心を幼児期に育てたいと思い、継続飼育を通じた“いのち”を感じる

教育を平成18年度より進めてきた。子どもたちは生き物との直接体験の中で“いのち”を心と体で感じるようになり、保護者も飼育を通しての心の育ちに関心を持ち始めた。今年度はその姿を大切にしながら、さらに家庭や地域に働きかけることでその浸透をめざし、実践を深めることにした。

### 2 年間の研究の経過（平成18年度～平成20年度）

年 度	○主な取り組み	◎成果 ・ ☆課題
18年	○子どもの興味・関心に基づいて動植物とかわかっているように園内環境の見直しを図る。 ・父親による栽培園作り ・園児によるアオムシ用のパセリの苗植え	◎触れ合える環境を整えたことにより、生き物を身近に感じるようになってきた。 ☆子どもの興味・関心の強い飼育に重点をおき、取り組みを考える。
19年	○生き物と触れ合う体験の充実に向け、発達に合わせた生き物を学年ごとに考え、飼育活動表を作成し、飼育活動に取り組む。 ・年少…ダンゴムシ、年長…ウサギ ・年中…アオムシ・ザリガニ	◎継続飼育をしたことで子どもの興味・関心が深まってきた。 ☆保護者の関心度に差があるため、啓発方法を工夫する。
20年	○昨年度からの飼育活動の継続の中で、保護者の協力を得ながら“親子飼育活動”に取り組む。	◎率先して生き物に触れたり世話をしたりする親子が増えてきた。 ☆家庭や地域に働きかけ“いのち”を感じる教育の浸透を図る。

### 3 研究のねらい

#### 【仮説】

親子飼育活動を通して、保護者に継続飼育の意義を知らせながら、ともに心をゆらす体験を繰り返すことで、“いのち”を感じ、命を大切にしようとする心が育つであろう。

#### 【各学年のねらい】

- 年少3歳児：身近な生き物を見たり触れたりして、親子で親しみをもつ。
- 年中4歳児：親子で身近な生き物に興味・関心を持ち、楽しんでかかわろうとする。
- 年長5歳児：親子飼育活動を通して、「いのち」を感じ、思いやりの気持ちをもつ。

### 4 研究の方法

- (1) 子どもや保護者の生き物に対する意識・実態把握  
(アンケート実施・読み取り・過去アンケートと比較)
- (2) 生き物との触れ合い年間計画表・親子飼育活動表作成
- (3) 各学年のねらいをもとにした実践・家庭や地域との連携

・環境や援助のあり方の探究・保育参観やたよりの充実  
・家庭や地域との交流  
(小学校・獣医師・ゲストティーチャーなど)

## H21年度 宮池幼稚園 3歳児 親子飼育活動

○ 3歳児のねらい…身近な生き物を見たり触れたりして、親

	4 月	5 月
環 境	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ ウサギを見たり、えさやりをしたりしやすいように、年少クラスの前にケージを置く。(年少クラス前…1羽ずつ入れたケージ4つ)</li> <li>☆ 園庭内のダンゴムシがいそうな場所を把握し、ダンゴムシが集まりやすいようにしておく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ ウサギ小屋の様子に合わせ年少クラス前・ウサギ小屋…</li> <li>☆ 身近な環境るように、ダン</li> </ul>
○子ども●親子◎地域活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>〈ウサギ〉</li> <li>○ ウサギに会うことを楽しみに、登園する。</li> <li>○ 見たりえさやりをしたりする。</li> <li>〈ダンゴムシ〉</li> <li>○ 保育室で飼育する。(継続)</li> <li>○ ダンゴムシを見たり触ったりする。</li> <li>○ ダンゴムシ探しをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>《親子ふれ合い》</li> <li>● 手遊び「だん</li> <li>● ダンゴムシ</li> <li>● ダンゴムシ探</li> <li>● 家庭でダンゴ</li> <li>○ ダンゴムシしをする。</li> </ul>
教師の援助へ	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ 教師が十分にスキンシップを図り、教師と一緒にウサギを見たりえさやりをしたりして、安心して過ごすことができるようにする。</li> <li>▲ ウサギに喜んでえさやりをしている姿を伝え、えさを持って来てもらうことをお願いする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ ダンゴムシをり触れたりする</li> <li>△ 怖がったり慣れ慣れていくこ</li> <li>《親子ふれ合い》</li> <li>△▲自分のダン</li> </ul>

<親子飼育活動表抜粋>

### 5 実践

#### (1) 家庭や地域との連携

##### ①親子わくわく会 (6月20日 9時～14時)

全国学校飼育動物研究会の事務局長(獣医師)による話を聞き、命を大切に育てる心の育成をねらいとして幼児期・児童期ならで



保護者対象講演会

はの体験の充実に理解を得られるようにした。

##### (ア) 幼小連携講演会「いのちを守るってどういうこと？」

(年長児保護者・宮池小1～3年児童とその保護者対象)



獣医師への質問

##### (イ) 年少・年中児保護者対象講演会

「言葉では伝えられない～心・いのち・脳をはぐくむ～」

##### (ウ) ウサギとのふれあいタイム (年長児とその保護者対象)

※アンケート提出者の97%の幼稚園保護者は「触れ合いの体験でさまざまな感情が育つことを再確認した」など、「よかった」と回答した。

##### ② 獣医師への質問 (9月25日 年長児とその保護者対象)

地域の獣医師を招き、ウサギの世話や夏休みの里親体験を通して出た疑問点や専門的な立場からの話を聞いて、その後の世話の参考にできるようにした。

##### ③ ゲストティーチャーによる体験談 (随時 全園児対象)

卒園児親子にウサギの里親体験談を聞いたたり、メダカの飼育を得意とする在園児の父親にメダカの特性を聞いたりして生き物に対する興味や関心を高められるようにした。

##### (2) ダンゴムシとの出会い (年少3歳児 4月～5月)

4月：ダンゴムシを初めて目にする子が多く「怖い」と泣いていた。中には「ダンゴムシは丸くなるんだよね」と無理やり丸めてしまったり、元に戻そうとしたりする子もいた。教師は「動かないね」「かわいそうだね」と言葉や表情で悲しい気持ちを知らせていった。

5月：“親子ふれあい会”では、親子でダンゴムシバッグを作り、園庭でダンゴムシ探しをした。子どもより目を輝かせてダンゴムシ探しを楽しむ保護者の姿が見られた。

##### <考察>

○子どもの行動に対して、その都度教師が悲しむ姿を見せたりダンゴムシにも言葉をかけたりした。そのことで、子どもたちは自分がしたことに対する何らかの気持ち悪さを感じたり、「かわいい」と言って触ったりすることができるようになった。

○子どもと一緒に保護者にもダンゴムシと触れ合う楽しさを味わえる機会をつくるのが大切であると感じた。

##### (3) 自分たちでザリガニの世話をしよう！ (年中4歳児 4月～6月)

- 4月：生き物コーナーにいる生き物（ザリガニ・カメなど）に親しみをもち、見ることを楽しんだり名前をつけたりしているものの、触れたり世話をしたりしようとする姿はあまり見られなかった。そこで、教師が水替えやえさやりをする様子を繰り返し見せた。
- 5月：教師と一緒にあれば、水替えやえさやりをするようになる。“親子ふれあい会”でザリガニ釣りをし、家庭で名前をつけて継続飼育をするように依頼した。
- 6月：「今日は水替えしないの？」「水が汚いと、ザリ子がかわいそう」という

声が子どもから聞かれるようになり、「ぼくがやる！」と積極的に世話をするようになった。

<考察>

- 教師が世話をする姿を見せたり、一緒に行ったりするなど段階を追って取り組めるようにしたことで、自ら気付いて世話をしようとする姿が見られるようになった。
- 家庭で保護者とともに継続飼育できるようにしたことで、子どもたちはザリガニをより身近に感じ、ザリガニの気持ちになって考えることができるようになった。

#### 4 ウサギの気持ちを考えて自分たちでできることをしよう！（年長5歳児4月～9月）

<p>&lt;子どもの姿&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「去年の年長さんみたいに、ウサギの世話がしたいな」「ウサギの散歩がしたいな」と飼育活動に期待をもつ。</li> </ul>	<p>&lt;ウサギの姿&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ケージを開けても出てこない。</li> <li>・ ブルブルふるえているように見える。</li> <li>・ えさ入れやトイレをひっくり返す。</li> </ul>
---	--

**ねらい：ウサギに思いやりの気持ちをもち、飼育活動をする。**

考え合う 4月～5月

ウサギが、ケージから出てこない理由をクラスで話し合う。「散歩が嫌なのかな」「外がうるさいからかな」など、自分なりに考えて意見を言う。その結果、ウサギが出ることを怖がっているという意見にまとまり、『自分から出てこない時は、散歩をしない』という約束ができた。

教えてもらう 6月20日 “親子わくわく会”

獣医師を招き、子どもとウサギの心音を聞き比べたり、ウサギの抱き方や触れ合い方を教えてもらったりする。ウサギの心音が小さく速いことを知って、「だからブルブルするんだね」「優しく抱っこをすると気持ちよさそう」など感じたことを言う。また、以前クラスで考え合ったウサギが出てこない理由を質問し、「小さいからみんなが追いかけると怖いんだよ」と答えをもらう。その他に、週末の世話の方法も話題となり、クラスで話し合い、金曜日はえさをいつもより多めに与えることになった。中には、夏休みの里親だけでなく土・日曜日にも「家に連れて帰りたい」という子もいた。

やってみる 9月

獣医師のアドバイスを基に、ウサギの世話や夏休みの里親体験をする。「おはよう」と声をかけたり、ケージを開け体を低くして様子を見守ったりすると、子どもたちに安心したようにウサギも自分から出てくるようになる。9月の連休を前に子どもから「えさがこぼれたら、お休みの間おなかが減っちゃうよね」という意見が出た。またそれを保護者にも伝えると、週末の里親を希望する声が聞かれ、夏休みのみ行っていた里親を週末も行うようになった。

## さとおやにつき

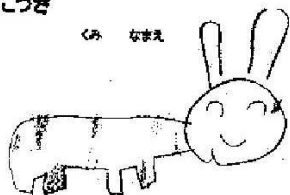
うさぎのなまえ

「くろちゃん」

さとおやきかん

【おがっすには～おがっすには】

きつねのこと・きつねなどを書いてください。



あおぐみでは、ロビーちゃんのお世話をしています。  
ただし、母が[ ]は、「せうだい、くろちゃんがいい!」と  
強い希望で、くろちゃんの里親を申し込めました。  
くろちゃんとおれ合っかが難しいらしい……という事は全く  
知りませんでした。本人は「どうしてくろちゃんにしたの?」と聞いた所、  
「くろちゃんにできる子が少ないから、くろちゃんがいいと思った」と  
いっていました。

家に連れて帰ってきた時、「何か理由でいつも会っている子だよ!  
心配しないで! こまかい! だから大丈夫だよ!」とやさしい言葉  
をかけている我が子に感動してしまいました。

[ ]はもう3人の子、姉2人もくろちゃんが家に来たときとても  
楽しみにしていて、姉弟3人と全く向きをさせた事がなかった  
私と、2泊3日を共にする事ができて、貴重な体験をする事が  
できました。うさぎに触れていると、命の大切さが伝わって  
きます。里親を希望して、本当に良かったと思いました。

### 里親日記抜粋

#### <考察>

○クラスでウサギの気持ちを話し合ったり、  
獣医師のアドバイスを受けたりしたこと  
で、自分の欲求ではなくウサギがしたい  
ことを考えて行動する姿が増え、思いや  
りの気持ちをもって接するようになって  
きた。

○親子で獣医師の話を聞いたり、子どもが  
優しくウサギに接する姿を見たりしたこと  
で保護者自身もウサギに対する関心や  
思いやりの気持ちが高まった。それが里  
親日記の内容に現れるようになった。

## 4 研究の成果と今後の課題

### (1) 今年度の成果

獣医師や有識者から飼育の意義について  
の専門的な話やゲストティーチャーによる  
生き物との触れ合い体験談を聞く機会をつ  
くった。また親子で楽しみながらできる飼  
育活動を取り入れたことで、保護者ととも  
に命について考え合うことができ、子ども  
の心の成長を喜ぶ声が多く聞かれるよう  
になった。保護者が継続飼育の意義を理解し

た上で、子どもの姿を見守ることの大切さ  
を改めて感じ、家庭や地域との連携の必要  
性を痛感した。

### (2) 4年間の成果

その年度の成果を基に次年度の課題を設  
定し、子どもたちが試行錯誤する時間や空  
間を意図的につくり継続飼育に取り組ん  
できた。また、保護者の思いも考え、興味  
のある保護者から徐々に4年間かけて継続  
飼育を通した“いのち”を感じる教育を  
広めてきた。保護者の理解や協力により、  
子どもたちは、発見や感動を通して命あ  
るものを大切に、思いやりの気持ちをも  
って接するようになってきていることを  
実感し、“いのち”を感じる教育の浸透  
を確信した。じっくりゆっくり時間をか  
けて取り組んできたことがよかった。

発達に合わせた生き物を考え、指導計  
画を立て実践を進めてきたことで、子ども  
たちは無理なく生き物に触れながら、「か  
わいい」、「どうしたら喜ぶかな」と心  
をゆらすようになった。周りの大人が生  
き物に対して敏感に感じ、心から大切  
にする姿を見せ、その心の動きを子  
どもに伝えていくことで思いやる気  
持ちにつながったと実感した。

幼児期に死を理解することは難しいが、  
「生き物をつぶしたらいけないよ」な  
ど言葉で教えるのではなく、周りの大人  
が悲しむ姿や生き物に声をかける姿を  
見せることが大切であると考え、繰り  
返し実践してきた。その時に抱く「か  
わいそう」「さみしい」と思う気持ち  
が“いのち”を感じることに繋がると  
感じた。この時期の心にしみ込む経  
験こそ、将来的に道徳教育につながり、  
自分の命も人の命も大切にしよう  
とする心を育むと考える。

### (3) 今後の課題

幼児期に育まれた感性はその後の児  
童期や人生に大きな影響を与える。今  
後も家庭や地域と連携を図りながら心  
をゆらす体験の中で、幼児期ならでは  
のやわらかい脳と心にさまざまな種を  
仕込み、人として相手を思いやる心  
を身に付け、命を大切にする子ども  
を育てていきたい。